

2017年2月2日
明治大学付属明治中学校

2017年度 中学入試（第1回）J1 問題 訂正

国 語

☐ 14ページ 9

(誤) 魚がえさに (ムラ) がる。

(正) つり糸を (タ) らす。

以 上

一

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。ただし、【】は語句の意味で、解答の字数に含めないものとします。

今僕はこうして言葉を書き連ねているわけですけど、この言葉が果たして読者のみなさんに届いているのかどうかはわかりません。でも、「届いているかどうか」ということは、言葉の内容が「正しいかどうか」「より」「有益かどうか」「より」も、はるかに根源的な問題です。だって、僕がどれほど立派なことを書いても、読者に「意味わかんねえ」と言われて、ばいと捨てられてしまつては、それつきりですから。まるで書いた甲斐がありません。

世の中には「読者に読まれようと、読まれまいと、関係ないね。オレは自分が書きたいことだけを書くから」という豪快な書き手もいるかも知れません。でも、僕は違います。僕は書く以上は読んでほしいし、理解してほしいし、できれば共感してほしい。今書いているこの言葉がひとことひとこと読者に「ふむふむ」としみ込むようであってほしい。

①それが非常に難しい仕事だということはわかっています。というのは、人間というのは外から入ってきた情報を「採り入れる」と「採り入れないこと」では「採り入れないこと」を優先する生き物だからです。まずその話からします。

生き物には「できるだけよい情報を探り入れない」という機能が初期設定されています。「情報を採り入れる」ではなく「採り入れない」です。それだけ聞くと変な話のように思えるかも知れませんが、よく考えれば、それが当然なんです。世界は無数の「ノイズ」②「騒音・雑音」に満たされています。そのすべての入力に対して均等な注意を払っていたら、身体がもたせません。ノイズはカットして、自分にとってほんとうに興味のある情報だけを選択的に採り入れるように人間の知性は構造化されています。基本のモードは「人の話を聞かない」なんです。

生き物としては、それで正しい。だから、「ぼんやりしているうちに、ついつつ親の説教を最初から最後まできちんと聴いてしまった」とか「ぼんやりしているうちに、ついつつ授業を最初から最後まで注意深く聴いてしまった」というようなことは絶対に起こりません。疲れていたり、睡眠不足で注意力が低下しているときは、残された有限な注意力はすべて「ノイズをカットする」ことに投じられるんですから。

ですから、僕が書いているこの言葉が「ノイズ」だと判定されたら、そこで「おしまい」です。誰も読まない、誰も耳を傾けてくれない「空語」③「むなし言葉」があてどなく空中を漂うだけです。

でも、この「ノイズ認定」は別にみなさんが「どうもウチダの話は面白くなさそうだから、聴くの止めよう」というふうな査定の手続きを経たのちに行われるわけではありません。みなさん自身は「ノイズかノイズでないか」の判定を自分ではしていない。その選別作業は、何も考えないうちに、あつという間に自動的に行われてしまうのです。「パーティ効果」④「つてご存じですか。何十人も人がいて、おしゃべりしている騒音の中でも、自分の名前を誰か口にしたときは、わかる。それだけは聞き逃さない」③それができるのは意味のないノイズも意味のあるシグナル【合図】も含めて、すべての入力を超高速でスキャン【細かく読み取り調べる】④しているレベルがあるからです。そのスキャン【スキャンすること】にヒットした情報だけが聞こえる。ヒットしない情報はすべてカットされる。この選別作業の手際の良さと精度はたいしたものなのです。

僕は長く教師をしていました。だから、教壇から僕が話している言葉が「ノイズ」認定されて、**A**と耳が閉じて、誰も僕の話をおかなくなる瞬間がどういふものかは身を以て味わい(尽く)しました。④それはいわば透明な壁が僕と学生たちの間に建てられて、両者を遮断しているというような感じでした。透明な壁ですから、お互いに顔は見えるし、声も聞こえている。でも、言葉の輪郭がぼやけてしまっていて、何を言っているのかは、わからない。

新米教師だった頃は授業がちゃんとできるかどうか不安でしたので、分厚いノートを作ってから授業に臨みました。そして、そのノートを必死になつて読み上げ、たいせつなことを板書しました。そして、ふつと振り返ると、教室中の学生が全員机につぶして寝ていた……というような痛ましい経験は何度もしました。一番前に座っていた学生は、なんとか眼を見開いて授業を聴こうと必死の努力をしているのですが、どうしても眼を開き続けていられない。ときどき「**B**」と我に返って、ノートを取り続けようとペンを持ち直すのですが、雪崩のように押し寄せる睡魔に抗し切れず、再び「**C**」と突っ伏してしまふ。ペンはそのまま白いノートに斜めの線を書いて止まる……。

雪山で遭難しかけている仲間に向かって、先輩のアルピニスト【登山家】が「眠るな！ 眠ったら凍死するぞ！ がんばれ、

目を覚ませ！」と頬を叩く場面がときどき映画にありますけれど、あれに近い感じですが。教師は学生の頬は叩けませんけど、気分的には「がんばれ、眠るな！」と言ってやりたい。でも、彼らは押し寄せる睡魔には勝てない。そうやって教室のほとんどが昼寝をしている前で、教壇に立ち尽くして呆然としている……というようなことも若い頃にはあったのです。

「若い頃にはあったのです」といささか余裕を持って今の僕が回顧できるのは、それからあと「寝かせない方法」を必死になつて探求した結果、ついに「寝かせない方法」を発見したからであります。

はい、発見したのです。

この「授業を寝かせずに聴かせる方法」は、「ノイズ認定させない」ということですから、「話を最後まで聞かせる方法」や「書いたものを最後まで読ませる方法」と原理的には同じものです。それがどういうものか、これからそれについてお話ししたいと思います。

つまり、これから後の話にいささか挑発的な見出しをつけるとすれば、^⑤「あなたは私がこれからする話を最後まで注意深く読んでしまうであろう」というものになるわけです。なかなか挑発的でしょう。

「そんな安手の挑発に乗るものか。オレは読み出したらすぐ寝ちゃうからな」という気合いの入った読者もいるかも知れませんが（僕も若い頃はすいぶん気合いの入った少年でしたから、その気持ちはよくわかります）。そういう読者のために以下の文章は書かれております。

こういうときは一般論をしてもダメなんです。一般論というのは「あなたに特に関係のある話ではありません」という前置きをしてから始まるものです。そんなもの誰も聞いてくれません。以下の話は「あなたに（すく）関係のある話」です。

それは今から10年くらい前、僕が兵庫のある県立高校に講演に呼ばれたときの話です。

その高校の生徒1500人くらいが体育館に集められて、パイプ椅子に座らされていました。司会の先生が「これからこちらのウチダ先生が君たちにとってたいへんためになる講演をされるから、みんなちゃんと静かに聴くように」という堅苦しいアナウンスをしてから僕にマイクを手渡しました。

この紹介の仕方はちょっとないんじゃないかと僕は思いました。体育館に集められた高校生たちに向かって「これから君たちのためになる話をこの人がするから、注意して聴くように」なんて言うのは、^⑥ほとんど「聴くな」と言っているに等しいわけです。

案の定、体育館を見渡したら、当然ながら、高校生諸君はあまり（というか全然）僕の話を書く体勢ではありませんでした。だって、寒い時期に、暖房もない体育館に集められて、パイプ椅子に座らされて、70分の間、どこの誰だかわからない大学の先生の話を書かなくちゃいけないんです（おまけに、そのときの演題はたしか「グローバル化する世界と大学教育」という、タイトルを見ただけで僕だって眠たくなるようなものでした）。

体育館の演壇から見下ろすと、高校生諸君は総じて「**D** 関心」と「憎悪」の中間くらいのまなざしを僕に向けていました。最前列の何人かはあきらかに「お前の話なんか、聴く気はぜんぜんないからね」ということを全身で表現すべく、椅子に浅く座って、両足を「これでもか」というくらい遠くに投げ出して、眼を半分閉じて、しっかりと腕組みをしていました。ちなみに「腕組みをする」というのは「お前の話を聴く気はない」という **E** 言語的な意思表示です。人の話を「聴きたい」というときは、あごの下に手をあてがって、膝を閉じて、ちょっと前のめりになって、にこにこしてみせるんです。当然ながら、そんなフレンドリーな高校生はみごとに一人もおりませんでした。

という絶望的な状況に置かれて、僕もさすがに進退に窮しました。行く前には、どんな話をするのかだいたいのプラン【構想】はあったのですが、今さらそんな話をしてもしょうがない。だから、「変な話」から始めました。

僕はちよつと中空に眼を泳がせて、ちよつとぶやきました。

「この体育館、『気の通り』がいいですね」

高校生たちはちよつと不意を衝かれたような顔をしていました。このおじさん何言ひ出すんだよ。「気の通り」？

「この学校は昔の藩校だったそうですね。さすがに昔の人はたいしたものですね。『風水』がすばらしい。みなさん自分の通っている学校の『風水』がすばらしいって、ご存知でした？」

高校生たちは「風水」なんて言われてもわかりません。でも、こちらは相手の虚を衝いて話を始めたんですから、それを押し通すしかない。

「校門の前に道を横切って小川が流れてますね。あそこが南です。風水で言う『朱雀』に当たります。そして、校舎を抱きかかえる二本の腕のように東西に尾根がありますね。東側が『青龍』、西側が『白虎』です。学校の後ろは小高い山になっていますが、これが『玄武』です。どうです、四神がきちんと揃っているじゃないですか。そればかりじゃない。みなさん、気づかれていますか、裏の尾根の上に神社が見えますけれど、あれは学校の北東の鬼門『不吉な方角』に当たります。鬼門に呪鎮の押えを配して、邪悪ものの侵入からみなさんを守っている。風水、完璧です。こんな学校、僕は見たことがない。ですから、当然ながら、この体育館も非常に気の流れがよいです。感じるでしょ？ 気の流れ……」

ここまで話すと、最前列で足を前に投げ出して「お前の話なんかぜんぜん聞かないけんね」というメッセージを全身から発信していた高校生たちもじもと身体を動かし始めた。

そりゃそうですね。「気の流れがいい」と言われて、「感じるでしょ？」と訊かれてるんですから。彼らは「話なんか聞く気はない」という初期設定でこの場に臨んだのではありましたけれど、状況がちよっと変わった。ですから、ここで微妙な調整を入れたのです。「感じる？」という問いを自分に向けて発してしまっただけです。

自分への問いを人は意識的に止めることができません。嘘だと思ったら、誰でもいいですから、近くの友だちに向かって、何でもいいです、そうですね、じゃあね、いま揺れた？」つていきなり訊いてみてください。「いや、揺れてないよ」と問髪を入れずに即答することとは人間にはできません。問いを聴き、問いに答えるのは **a** の仕事ですけれど、揺れたかどうか感知するのは **a** じゃなくて **b** の仕事だからです。自分の **b** に対して「いま揺れた？」と問いかけて、「いいえ」という返事をもらってからでないと「揺れてないよ」という回答は果たせない。ここに一瞬の「間」が生じる。そこが勝負どころなんです。

「この体育館、『気の流れ』がいいって、あの男は言うけど、ほんと？」と高校生たちは自分の **b** に訊いてみた。しか

たないですよ。

a は「気の流れ」なんてどんなものか想像もつかない。でも、もしかしたら **b** は知っているかも知れないから。病院で熱を計ってもらったら看護師さんに「あら、けっこう熱あるわね。寒気しない？」と言われたら、僕は「寒気がしているかどうか」ととりあえず身体に訊いてみます。言われてみれば、なんかぞくぞくするような気がする。そこで「はい、寒気します」と返事をする。そういう手順に決まっているんです。「身体に訊かないとわからないこと」については、一瞬だけ判断を保留して、身体に訊いてみる。

「気の流れ」というのがいったいどの感覚器官で感知すべきものか、ふつうの高校生は知りません。そういうのは皮膚感覚の領域かなと思って、自分の皮膚に訊ねてみる。「気の流れ、感じる？」つて。そして、返答を待つ。でも、もちろん、身体からの返答はありません。だって、身体だって「気の流れ」なんて知らないから。それでも、身体はさすがに生き物です。「『気の流れ』などというものはこの世に存在しません」というような木で **F** を括るような回答はしません。身体はそういうことはしません。「ある」「ない」か瞬時のうちにデジタルに切り分けるのは脳の仕事で、脳の趣味で、脳の義務です（「ノイズ」と「シグナル」の切り分けがそうです）。けれども、身体は違います。身体には「判断を先延ばしにする」という選択肢があります。

高校生たちが「感じる？」と自分の身体に訊いたときの身体からの回答は「判断保留」です。身体はこの問いにこう回答してきました。「データ不足につき回答不能。さらに追加データをお願いします」

「データ不足で判定できませんからもうデータを送ってください」と言われては仕方ありません。もつとデータを送るしかない。でも、「追加データ」をどこから採るかと言えば、それはそもそも最初「気の流れ」について自信たっぷりに語った僕の話からしかない。となると、僕の話をもう少し聞く以外に「追加データ」を採る方法がない。でも、僕がしゃべっているとき、どの言葉が身体が求めている「有意なデータ」であり、どの言葉が聞き流してよい「無意味なノイズ」なのかを、高校生たち自身は自己決定することができません。だって、自分がどういうデータを求めているのか本人は知らないんですから。

どんなデータを探ればいいのかわからないにもかかわらず、身体からは「追加データ」を要請してきている。となると、とりあえず耳から入ってきた入力情報は全部そのまま身体に丸投げするしかない。とにかく耳に入ってきた音声は逐次「順番に」自

分の身体に流し込んでゆくしかない。これが「耳の蓋」が開いた状態です。

脳の主たる仕事は「ノイズをカットすること」ですけれども、今の場合は身体の方から「ノイズをカットしないでください」という要請が来ている。生物に初期設定されている「意味がない情報は取り入れない」というノイズ・カット機能を「止めて下さい」と自分の身体の方から言ってきているんです。とりあえずそれに従う。

さあ、ここまで来れば「話を聴いてももう」体制は90%くらい完成したと言ってよいと思います。あとはほとんど下手を打たなければ、高校生諸君はもう寝ません。別に目をきらきらさせて聴き入るということではありませんが、たぶん最後まで僕の話をも自分の身体にどんどん流し込んで行ってくれるでしょう。それでいいんです。僕はそれ以上のことは求めていません。別にスタンディング・オベーションで送られるような華々しい成功をめざしていたわけじゃありません。最後まで眠らずに話を聴いてもらうことだけで十分です。そして、実際にこのときの講演では、高校生たちは最後までみんな目を見開いて僕の話聴いてくれました。話の中身を理解してくれたかどうかはわかりません。全部は理解してくれなかったと思います。でも、いいんです。最後まで聴いてくれたから。そして、たぶん多くの高校生たちは「なんだか今日はすいぶん『変な話』を聴いたな……」と首を傾げながら家路についたんじゃないかと思えます。それで、いいんです。①②

すっきりわかられてはむしろ困る。言葉を発するときに、「喉元まで出かかっているんだけど、うまく言葉にならない」ということがありますけれど、あれの逆です。聴くときには、「たしかに言葉は聴いたんだけど、それがうまく喉元を通り過ぎてくれない」というあたりがいいんです。

どうして、「意味がよくわからなかった」話の方が「隅から隅まで意味がわかった」話よりも生産的なのか。それは身体が聴いたからです。人の話を頭で聴くと「わかったか」「わからなかった」の二つしかない。身体で聴くと「わかったような、わからなかったような……」という宙吊り状態になります。

誤解している人が多いと思いますが、「わかった」というのはあまりコミュニケーションの場において望ましい展開ではないんです。だって、そうでしょ。親とか先生から、「お前が言いたいことはよくわかった」ときっぱり言われると、ちょっと

傷つくでしょ。だって、それは「だからもう黙れ」という意味だから。

ふつう人を好きになったときに、相手から一番聴きたい言葉は何ですか？ 「あなたのことを完全に理解した」ですか。まさかね。そんなこと言われてうれいわけがない。だって、それは「だから、あなたにはもう会う必要がない。あなたの話を聴く必要もない」ということを含意しているわけですから。

人を好きになったとき、その人の口から僕たちが一番聴きたい言葉は「あなたのことをもっと知りたい」でしょ。誰が考えたって、そうですよ。

でも、「あなたのことをもっと知りたい」というのは、言い換えれば「あなたのことが現時点ではよくわからない」ということです。よくわからないからもっと知りたい。ちょっとだけわかったけれど、まだまだわからないところが多い。だから、「もっと知りたい」と思う。

そういうものなんです。この機会に覚えておいてください。「わかった」というのはあまりいいことじゃないんです。人間同士では、「わかると、コミュニケーションが終わる」ということになっている。本を読んで、中身が全部理解できた。そして、その本のタイトルも著者名も、書いてあったことも、何もかも全部忘れても、困らない。だって、全部理解できたんですから。その本には僕たちが「もともと知っていたこと」が書いてあったか、読んでいるうちに「血肉となったこと」が書いてあったか、いずれにせよ改めて記憶する必要もないし、手元に置いておく必要もない。そのままゴミ箱に捨てても困らない。

読者に「全部理解された」おかげで、二度とタイトルも著者名さえも思い出されないような本を書きたい人はいないと思います。少なくとも僕は書きたくありません。僕は「あなたの話は全部理解できました」なんて言って欲しくない。僕が聴きたいのは「なんだかわかったような、わからなかったような……」です。それは聴いた人の身体の中に言葉が収まったけれど、まだうまく片づかない宙吊りになっているということだからです。「わかったこと」のファイルにも「わからなかったこと」のファイルにも分類されていないで、そのままデスクトップ【パソコンの画面】の上に置きっぱなしになっている。それこそ、僕たちが人に言葉を差し出したときに受けとることができる最高の歓待【おもてなし】です。そう思っている人がどれくらいいるかわか

りませんが、僕はそう信じています。

身体が開放状態になるのは僕たちが自分の身体に向けて問いを発した場合だけです。

では長くなりましたので、そろそろ巻きに入って、結論を申し上げます。

コミュニケーションの現場において、人がちゃんと僕の話の話を聴いてくれる状態というのは、僕が「たいへん役に立つこと」を話しているという確証が先方にあるからではありません。僕の言うことが実には **G** 的かつ比喩もカラフルで、言いたいことがすららと全部わかるからでもあります。そうではなくて、聴いた話の真偽や当否についてとつきには判断しかねたので、答えを自分の身体に訊ねた場合だけです。

この原理を応用すると、大学の授業でも、教室内の全員が僕の話の話を理解するという **H** 的な瞬間が起きることがあります。それは例えば教師が「後ろの方、聞こえますか？」と問いかけたときです。なんと、驚くべきことに、この問いに「聞こえません」と回答する学生たちがいるのです。不思議でしょ？ だって、聞こえないんですよ！

よく考えてみてください。このとき学生たちは実に複雑な操作をしているんです。まず教壇にいる僕から **I** 的な音声がかえってくる。「うし……きこ……ますか」くらいしか聞こえない。僕が何を言っているのかわからない。「牛の肉を食べ、ワインでもきこしめしますか」と言っているのかも知れない。でも、授業の冒頭に教師が教壇からそんな変なこと言うわけがない。だから、同じ「うし……きこ……ますか」という音で構成可能なセンテンス【文】をいくつか思い浮かべて、その中で一番「ありそうな文」を選び出す。聴き取り不能だった音を「たぶん、あれだな」と想像して補てん【不足を補って埋めること】する。その仮説に基づいて、「声が後ろの方まで届いていないので、（マイクを使うとかの）しかるべき補正手段を採って下さい」という遂行的なメッセージを「聞こえません」という一センテンスに託して発する。

すごいですね。これだけ複雑な操作を一瞬のうちにに行っているんです。でも、それが可能なのは、すべて僕の言っていることが「よくわからない」からなんです。「よくわからない」がゆえに、「わかる」ために、状況判断したり、候補文をスキャンしたり、虫食いのメッセージを補って完成させている。

エドガー・アラン・ポウの『黄金虫』という小説を読んだことがありますか？ なければ、ぜひ今から本屋に行って文庫本を買つか、図書館に行って借りて来るかしてください。読んで損はありません。『黄金虫』は虫食いだらけの暗号文を解説して海

賊キッド船長の財宝を見つけたという話なんですけれど、暗号解説のために主人公がしているのはまさに「**c**」と同じ操作なんです。まず、海岸で拾ったぼろの羊皮紙に不思議な模様がついていた。これは「よくわからない」情報入力です。

そこで状況から判断して、「たぶんこういうことを書いたものだろう」と推理した。そして、その虫食いのメッセージの「穴」を埋めていった。やっていることは **J** 的には同じことなんです。

それが人間の知性が最も活発に発動しているときのあり方なんです。

「後ろの方聞こえますか？」という僕の問いに「聞こえません」と答えた学生たちもこのときに「自分の身体に訊いている」。わかりますよね。「今、揺れた？」とか「寒気するでしょ？」とかと同じタイプの出来事なんです。聴覚記憶は音が消えてしまつた後でもかなりの時間、身体の中に残っています。人間は「もう聞こえない音がまだ聞こえる」し、「まだ聞こえない音がもう聞こえる」というような能力を備えています。音楽を聴くというのは、まさにそういう経験ですからね。僕たちがメロディとかリズムとかグループとかいうものについて語れるのは、「もう聞こえなくなった音」や「まだ聞こえない音」がいまここで聞こえるからです。

「後ろの方聞こえますか？」と僕が言ったときに、学生たちは自分自身の聴覚記憶に問いかけているんです。「私には何が聞こえたのか？」

もう一度繰り返しますが、「身体に訊く」という構えを採用するときに、身体は開放状態になります。そして自分自身の身体記憶の貯蔵庫の中を探って、時間を遡ってモニター【点検】を始める。そして、「虫食いの状態のメッセージ」の穴を自力で補てんしようとする。

この作業を「知性的」と言わずして何と呼ぶべきでしょう。

僕が何を言いたくてこんな話を書いているのか、もうお分かりになりましたね。

僕は「人の話を最後まで聴かせる方法」とはどういうものかをみなさんにご教示しますという宣言によってこの文章を書き始めました(覚えてますか)。そして、僕がたどりついた結論は、「自分の身体に訊く」ように仕向けければ、人は外界からの情報入力に対して開放的になり、貪欲になり、「もつとデータを」という前のめりの構えになるということです。これが「学ぶ」ということです。

僕の話はこれでおしまいです。

みなさんは「なんだかわかったような、わからないような話を聞かされた」という片づかない印象を持っただろうと思います。別に理解なんかしないでいいんです。でも、そうですね、あと10年くらいして、みなさんが人前で話をする機会があったとします。プレゼンテーションとか、学会発表とか。そのときに、聴衆の側にいまいち「聴く姿勢」がないと思ったら、「後ろの方聞こえますか？」と訊いてみてください。あるいは「この部屋ちよつと冷房効き過ぎてませんか？」でもいいです。あるいは「カーテン閉めましょうか。西日がまぶしくないですか？」でもいいです。そのとき一瞬聴衆たちが「自分の身体に訊く」のがわかります。そのときに与えられた短いチャンスを逃さないように。

みなさんのご健闘を祈ります。

(内田樹「転換期を生きるきみたちへ」より・一部改変)

問一 ― 部①・③・④・⑦「それ」はそれぞれ何を指しますか。

問二 ― 部②「ノイズ」とありますが、ここでは何を指しますか。十五字以内で答えなさい。

問三 文中の A C にあてはまる言葉として最も適切なものを、次のア～オから選び、記号で答えなさい。
ただし、同じ記号は二度使えません。

ア ぞつ イ はっ ウ びたり エ くつきり オ がっくり

問四 ― 部⑤「あなたは私これからする話を最後まで注意深く読んでしまおう」というものになる」という言葉に

は、筆者のどのような考えがありますか。

問五 ― 部⑥「ほとんど『聴くな』と言っているに等しい」とありますが、なぜですか。

問六 文中の D E にあてはまる言葉を次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 未 イ 非 ウ 無 エ 不

問七 ― 部⑧「高校生たちがもじもと身体を動かし始めた」とありますが、なぜですか。

問八 文中の a b にあてはまる言葉を本文から抜き出しなさい。

問九 文中の F にあてはまる言葉を、次の慣用句を参考にして漢字一字で答えなさい。

(F)につく (F)にかける (F)をあかす (F)が高い

問十 ― 部⑨「入力情報」とは具体的には何ですか。

問十一 本文から次の文が抜けています。どの段落の前に入れるのが適当ですか。その段落の初めの五字を答えなさい。

ただし、そういう「^{かん}期待」を期待するためには条件があります。それは「身体で聴いた」「身体で読んだ」という場合だけです。だって、「データ不足で真偽・良否の判定不能。追加データを」というふうに要請してくるのは身体だけだからです。「氣の流れがいいの？」と高校生たちが自分の身体に訊いたときに、「耳の蓋が^{ふた}開いて」、身体が開放状態になった。

問十二 ― 部⑩「ここまで来れば」話を聴いてもらう「体制は90%くらい完成したと言つてよい」とありますが、なぜですか。

問十三 ― 部⑪「というか、それが、いいんです」とありますが、なぜですか。

問十四 文中の G J にあてはまる言葉を次のア～オから選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は二度使えません。

ア 奇跡 せき イ 構造 ウ 感情 エ 論理 オ 断片 べん

問十五 — 部⑫「虫食いのメッサージを補って完成させている」と同じ意味を表す部分を本文から三十字前後で抜き出し、その最初と最後の五字を答えなさい。

問十六 文中の c にあてはまる言葉を本文から六字で抜き出しなさい。

問十七 筆者がこの文章を通して伝えたいことを、七十字以内でまとめなさい。

二

次の1～10の文中の(カタカナ)を漢字で書きなさい。

- 1 人工(エイセイ)を打ち上げる。
- 2 文章の(コツカク)を考える。
- 3 (シャソウ)の景色を楽しむ。
- 4 試合を見て(コウフン)した。
- 5 (カンソ)な住まい。
- 6 議員を(ジシヨク)する。
- 7 野菜の(ヒンピヨウ)会。
- 8 体力を(ヤシナ)う。
- 9 魚がえさに(ムラ)がる。
- 10 医者を(ココロザ)す。

＊解答する順番に注意すること。

⑦	
④	
③	
①	

得	点
---	---

[illegible]